

## 龍南會雜誌に寄す

周防の國徳山に於て

杉 山 富 槌

予龍南の校舍を去りてより、星霜と閱すること茲に七。今にして往時を憶ふ、感慨何を極まらん。聞く所によれば、予が親受なる龍南會雜誌も今は既に第百號に達し、新なる趣向を凝してその健全なる發達を祝するの計畫ありと美擧といふべし。それ龍南會雜誌は龍南數白の健兒の機關にして、第五高等學校の面目は眞にこれによりて社會に紹介せらる。予も曾てこれが編輯に従ひ、この精神を以て切に學校の眞面目を表示せんことを冀ひ、又大にこれを勉めたりしも、竟に及ばざりき。而して後進有爲の士の志を繼ぎて予等の遺憾を除去すべきことを望み、又これを囑したりき。爾來龍南會雜誌の健在にして發達の見るべきものあるは、實過去數年間當局者ろの人を得て、幹旋盡力尠からざりしに因るものにして、之を思へば、予は殊に欣喜に堪へざるなり。今や雜誌の第一世紀を終らんとす、予はろの第二世紀に於ける更に顯著なる發達を祈望す。左に録する所は、雜誌第百號祝賀のためにとて草せるにあらざれども、委員諸賢の懇請もありたれば、これを寄することゝせり。蛇足を添ふるの罪は甘受する所なり。

明治三十六年五月下院

## ○天下第一品の人物

寧爲天下第一品人、母レ爲天下第一品官、

これ古人の覺悟なりき。道義重んぜられ、品性尊はれしも、この覺悟ありたればなり。今は則ち然らず。天下第一品の人物たらざるも、尙ほ天下第一品の官位に登らんとす。こゝに於てか奸詐行はれ、阿媚用ひられ、曲學賣節、聲譽これ盡さざるを恐る。觀し來れば、古代の道念と現時の道念とは、正にこれ相反するものあるを知る。嗚呼果してこれ時勢の變遷の止むを得ざる結果なりといふへきか。盜泉の水を飲むも渴するなかれとは文明社會に於ける道德の標準なるへきか。諺に曰く、大珣は細瑾を顧みずと。而して今日は細功の爲めに大瑾を顧みざる人多かり。これ即ち道德の進歩と稱すへき者なるか。小學教師は兒童を陶冶訓育するに道德的品性を造成するを以て目的とす。而して社會の要求は之に反す。小學教師の目的とする所果して誤れるか、はた又時勢の傾向果して非なるか。

## ○偉大なる人物

輿論は愚論なりとは誰が言ひ初めたるにや。吾人はこの言を以て全然眞理を含めりとするものにおらず。されど更に之を熟考れば、吾人これによりて大に學ぶ所あるべきなり。世人の謂ゆる世渡りの巧手なるものは、善く輿論に吻合するものなり。衆人の見る所に反對して事の成就するを見ることの困難なるは、舟車を借らずして千里の外に至らんとするが如し。人誰か世に勝たん。英雄は世に勝つ、而かも實は時世の變轉を利導せるものに外ならず。善言は輿論に恃ふ、是聖賢の生を終るまで道のために奔走する所以なり。才あるものは一世の風尙を見るに敏にして、速に時好に投ず。

こゝに於ては聲譽財意の如く致すを得るなり。一の時代に生を享く、一の時代の精神を看破する能はざるものは則ち迂なるを免れず。よく一の時代の精神を看破して、これが爲めに役せられざるもの之なし。然れども人は一時代に生きて一時代の精神を看破し、之に役せらるゝのみにては、未だ以て偉大なる人物となすべからず。

爲レ文而欲ニ二世之大好、吾悲ニ其爲レ文、爲レ人而欲ニ一世之人好、吾悲ニ其爲レ人、

蓋し吾人の理想は二時代に局限せらるゝ時に於て偏狹に失するを免れず。況んや輿論なるもの往々愚論なるに於てをや。

### ○行動と道義と

事を起す、人先づその成否を測る。成算ありて則事に従ふ。或は成るあり、或は成らざるあり。然れども事その當然の理に適ふ、敗るといへども或意味に於ては成功せるなり。事その道に悖る、成るといへども或る意味に於ては失敗せるなり。吾人の云爲行動亦然り、一擧手一投足の微細なる點も必ず道義に合するを要す。

行合ニ道義ニ不レト自吉、行悖ニ道義ニ縦ト亦凶、人當ニ自下ニ不ニ必問レト、

現今の時代に於ては、言行の道義に合すると否とは問ふ所にあらず。苟くも法網を免るゝを得ば、怙然として耻づる所なし。巧妙に世渡りすることは即ち狡猾に他人を制遏することを意味す。彼等は複雑なる文明社會に於て道義を云々するはうもく迂なりと信認するなり。禍己の欲を縦にするより大なるはなし。誰れも現今の時勢はこれを否定せんとするものと知し。嗚呼行動の道義に合する、

果して凶なるか、己の欲を縦にする、果して吉なるか。

○交 友

人之交<sub>レ</sub>友、不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>趣味兩字、有<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>趣勝者、有<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>味勝者、然寧饒<sub>二</sub>于味、而無<sub>二</sub>寧饒<sub>二</sub>于趣。然り而して方今の交友趣味を基とせるもの鮮し。多くは利を以て集合し、利なくんば則ち離散す。禽獸の群と相距ること果して幾何ぞや。

○清名清福

凡名易<sub>レ</sub>居、只有<sub>二</sub>清名難<sub>一</sub>居、凡福易<sub>レ</sub>享、只有<sub>二</sub>清福難<sub>一</sub>享、  
現今文明開化の時代に至りては、清名とか清福とかいふだけが野暮なり。能ふべくんば同人をも陥躋して虚榮暴富を收得せずんば休まず。清名清福を求むること餓れたるものにして尙ほ且つ食を擇ぶか如くありし往古清廉朴素の風は、今や則ち之を求むべからず。武士は食はねど高楊枝とば、今や武骨なる時代の瘦我慢として嗤笑せらるゝ俚諺となれり。武士道の一掬愛すべき情味は、今の紳士にとりては殆ど無意義のものたり。識者にして社會道德の廢頽を痛歎するもの多し。心あるもの豈願慮する所なくして可ならんや。

○反對の一致

二は五に等しかもず、然り、人皆之を知る。

稱傲不可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>高譎諛不可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>謙、刻簿不可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>嚴明、闌茸不可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>寬大。

然れども稱傲なるは高とせられ、阿媚附縱せざれば謙讓なりとせられ、嚴明は刻薄と誤解せられ

、蘭茸と寛大と同一視せらる。蓋し世には極端と極端と同一點に歸することもあれば、前掲の如き反對の相一致するも怪むに足らざるが如し。嗚呼直に是れ奇なる事相にあらずや。

○大通と大塞と

有<sub>二</sub>大通、必有<sub>二</sub>大塞、無<sub>二</sub>奇遇、必無<sub>二</sub>奇窮、

社會萬端の事、勝ちて兜の緒を緊むる心掛けあらば、功焉を傲るべけんや。窮も亦敢て悲むに足らざるなり。彼の徒に小功を得て得々たり、小窮に遭ひて絶望落膽、措置する所を知らざるが如き徒輩、寧ろ大に之を憐むべきにあらずや。

文藝批判家としての劉勰

飯田御世吉郎

(一) 劉勰以前文藝批判

支那に於ける文藝批判の源頭に遡つて遙く先秦時代を摸索するに、易に修辭立誠と説き書に、詩言志歌永聲と説けるか如き、たぼろげながら先づ文藝に對する稱説、濫觴とするを得む。仲尼時に詩歌を説き、音樂を説き、夏殷周の典章を云々せざるにあらず、されど概ね三代文化大躰の特色をいふに止りて、未だ文藝の批判に及べるとなし。周末春秋より戰國に亘りて諸子百家競ひ起りて、雲蒸龍變の奇觀を呈し、互に辯難攻撃を逞う電、甲論乙駁、紛然結ばれて解けず、其間に荀卿の非十